



放浪研究者

「あなたがこの職業を選んだ理由は何ですか？」と聞かれたら、日々の職務に忙殺される社会人の何割がすぐに回答できるだろうか。かくいう私も、研究者という職業がこれほど多岐に渡る業務をこなすものとはつゆ知らず、気づけば研究者として糊口を凌ぐべく奮闘の毎日である。大学学部時代、2年間バイトをして資金を貯め、3年次にバックパッカーとして海外諸国を放浪した。目くるめく異文化の波はたちまち私を虜にし、4年次になって待ちに待った（はずの）研究室配属が決まると、そのうれしさより前に、「海外放浪もこれまでか」と一抹の寂しさを覚えた。もとより研究の道を全く考えておらず、修士学生ときには人気業種の外資系コンサル会社就職を目指し、就職先も決まった挙句ひょんなことから就職をやめて博士課程に進んだ。研究のキャリアが成果主義だとみるや、普段は徹夜も厭わず実験に没頭し、論文草稿にまとめるとすぐさま海外放浪に出るということを繰り返した。こうして、この一見すると相いれない研究と放浪は、それぞれが互いのモチベーションとなり博士課程の日々を過ごす糧となったわけ

だが、学位を取得して海外に武者修行へ出たところで意外な融合を見せた。同僚、部下、学生を問わず、さまざまな国から来た研究者と仕事をする際に、大概是彼らの国を訪れた経験のある私は自然と彼らのものの考え方を受け入れられるのである。そして、研究という共通の興味と知識背景を持ち合わせていれば、初対面の研究者同士ですぐに打ち解けることができ、共同研究にとどまらず、果ては休暇を共に過ごす親友となりえるのである。複数の国々で15年ほど研究を続ける中で、気が付けば自分にはあたかも研究をしながら長大な海外放浪の旅を続けているのではないかという錯覚にさえ陥った。近年、縁あって私は日本に帰りつくことができ、海外放浪は一旦収束したようだが、キャリアパスについて講演する機会が増えてきた昨今、決まって冒頭の質問に答えなければならなくなる。海外放浪が研究をも飲み込んでしまった私にどんな回答ができるのだろうか？ おそらく、私は研究という共通の興味で国や文化を越えた世界中の人と知り合い、交流できることをこの職業の醍醐味と感じているのだろう。アカデミックのキャリアパスに将来が見いだせない学生が多いとは最近よく聞く話である。子は親をみて育つように、学生も先生やラボの先輩を見て将来像を投影するのだろう。モチベーションはどうであれ、研究を生業にすることもなかなか楽しそうだと後進の目に映るよう、日々余裕をもって自身の職業を楽しむゆとりを持ちたいものである。

(YN)